
誠吾の剣

蹴球野郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誠吾の剣

【Nコード】

N8560I

【作者名】

蹴球野郎

【あらすじ】

大学進学と同時に、裏神鬼流剣術の総師範となった竹之内 誠吾 が 時空を超えたある剣と出会い、現代、異世界で、活躍していくファンタジー？な話し、にしていく予定です。

始まり（前書き）

初投稿です。長い目で見てください。

始まり

杉並にある、とある道場の中、裏神鬼流剣術 総師範 竹之内 誠吾（19歳）は
凜とした朝の空気を感じながら、瞑想を続けていた。

裏神鬼流は、起源をさかのぼれば、遠く卑弥呼の時代より受け継がれている

対人、対人外 に対する総合剣術である。竹之内家が表の歴史に登場するのは

平安時代からであるが、剣流と共に脈々と受け継がれてきた。

誠吾が大学に進学する時を同じくして、前総師範 父 弥一より、全ての奥義を

引継ぎ、総師範になったのであった。

瞑想を始めて、どれくらい時間が経ったのであろう。

ふとした気配に、誠吾は薄く目を開け道場にある時計を確認した。

「うん、朝の五時過ぎか。もうすぐ、大学に行く準備をしなければ。」

そうつぶやくと、立ち上がり、本家のほうに向かい歩きだした。

その時、先ほど感じた気配を確認しようと、縁側の方に目を向けると、朝日とは違つ

光が、誠吾の目にはっきりと映り、不審に想った彼は、縁側へと、その歩みをかえた。

「なんだ、この光は。」

それは、サッカーボールぐらいの大きさだった。しかも時間が経つにつれて、その光は目も開けられないぐらい、眩くなっていった。

「う！まぶしい！何が起こっているんだ？！ 話に聞いている人外の敵が来たのか？

もう150年も来てないって親父のやつ言ってたのに！」

「ふー。裏神鬼流 滅界。」

精神を落ち着かせ、戦闘状態に自身を持っていく呼吸法を唱え、誠吾は光と対峙した。

と、その時、光の方からかすかに声が聞こえてきた。いや、声というより、誠吾の頭の中に直に響いてくる感じだった。

「。。。あ。。。ある。。。

主様。。。ようやく。。。あえ。。。」

始まり（後書き）

アドバイス、なんでもください。

出会い（前書き）

人生を大きく変える剣との出会い。
現実だったら、すごいなあ。。

出会い

『主様。ようやく巡り合えました。時空をさまよい、我にふさわしい方を探してまいりました。』

その声に、誠吾はしばらく呆然としていたが、

「なんだ？主様？お前は誰だ？主様と言うからには、敵では無いの
だろうが。」

『はい。我はあなたの敵ではありません。我は剣でございます。あなたの力となり、あなたを守る存在でございます。』

「突然そんなことを言われても。っていうか、剣なのにしゃべれるのか？俺の力になる？守る？意味がわからん」

『突然のことで申し訳ございません。これから、全てを説明させて頂きたいと想いますが。』

「説明つて。まあいいや。それと、まぶしいからその光何とかならないか？」

『もう少しお待ちください。我が実体化すれば、光は自然となくなります。』

「わかった。それで？説明とやらを聞こう。」

これが俺と剣の出会いだった。

出会い（後書き）

短すぎますね。

以降 頑張ります。

契約（前書き）

説明だけかな？つまらないかも。

契約

『我がどの世界で、何時生まれたかは、もう覚えておりません。遠い遠い昔、この世界が出来たときにはもう生まれていたのかも知りません。我を手に取り、契約を交わしたものは、我の力を使い、人外のもの、魔物と対峙し、何時の時代も無垢なる者たちを守ってきたのです。』

「ちよつと待て。なんとなくわかってきたが、なんでまた、この時代の俺の所にきた？」

『はい。主様は、人外の者にも対処出来る剣術をすでに会得しておられますし、なおかつその身に秘めた膨大な魔力が、我を導いたと考えます。我を使役出来るのは、特別な力を持つ者のみです。長き間、我と契約するに値する方を探し続けてまいりました。』

「魔力つて。この世界に魔法なんぞないぞ。確かに裏神鬼流には人外の者に対する奥義はあるけど。」

『それは、その都度説明してまいります。』

「えつと。で、簡単に言うと、お前がきたということとは、この時代に魔物が出てくると。それを俺に退治しろと言うことか？それに、お前の力っていったいなんだ？」

『魔物が現れるというのは、否定しません。ただ、主様の世界にくるのは、後二つの世界が魔物との戦いに勝つか敗れるかした後だと思いません。』

「え？後二つの世界？どういう意味だ？」

『はい。世界はひとつでは無いと言つ事です。こちらの言葉で言えば、異世界となるのでしょうか。』

『先ほどの質問の答えになるかも知れませんが、私の能力のひとつ、世界を渡る力で、それぞれの世界を救いに行きましょう。魔物はなぜかひとつの世界にしか現れませんし、現れれば我にはどの世界かわかります。』

『他にも我には様々な力があり、それは主様を守れると思つています。』

「力に関しては、おいおい聞こう。聞き流していたが、どの世界でつてそういうことか。にわかには信じられんな。でも、剣がしゃべつてるし、これは現実が起こつてることだよな。ただ、奥義は会得しているが、実践したことはないぞ？魔物も見たこともないし。本当に俺が、その世界を救えるのか？」

『もちろんです。悠久の時の中、我を使役したのは6人の英雄と呼ばれたものたち。しかし主様の資質はその誰よりも素晴らしいと思つています。』

「なんかよくわからないが、昔から親父には、自己に厳しく、他の者を助けるのが裏神鬼流だと言われてるからな。もし、俺の力で他の世界の人たちを救えるのなら、やってみるか。」

『はい、主様のお力を、是非、人々のためにお使ください。』

「わかった。お前と契約しよう。そして魔物を倒し、人々を守ろう。」

その言葉と同時に光が収まっていき、誠吾が目を開けると、縁側のふちに、一振りの剣が浮かんでいた。

その剣は、眩く光り、全てを切り裂く強さを誇りながら、それでも心を落ち着かせるような優しさをも持っている。

「それで、どうやって契約するんだ？」

契約（後書き）

ポイント、お気に入り、本当に涙がでました。
有難うございます。

契約2

「それで、どうやって契約するんだ？」

『まず、私の柄を握ってください。』

「わかった。ん？ お前は両刃なんだな。それで剣か。俺は刀しか使ったことが無いが大丈夫だろうか」

『主様の力量なら問題ありません。それより、柄を握ったら、深く瞑想をしてください。』

「うん」

誠吾は瞑想をはじめた。すると、誠吾の心景のなかに、綺麗な泉が現れ始めた。

「あれ？ここは？」

『主様の心情風景です。ようやくお目にかかれました。我が剣でございませぬ』

誠吾の目の前に、30歳前後に見える一人の男がいた。

「お前が。。なかなかいい男だな。」

『我には性別はございませぬ。ただ、主様のイメージがそうさせたのでしゅう。』

「そうか。それでどうしたらいいんだ？」

『私の名前を呼んでください。それで我は主様と契約できるのです。私の名前は、こちらの言葉で言うところへ碎魔（さいま）と言います。そして、共にあれ。』

「よし。碎魔よ。俺と共にあれ！」

『はい。主様。我は主様と共に』

そう碎魔がつぶやいた瞬間、剣から誠吾に一筋の光が流れ込んだ。

「うん。何か暖かいものが俺の中に。これがお前とのつながりか。それと、俺のことは誠吾と呼んでくれ」

『わかりました、誠吾様。これから我は誠吾様の剣となり、盾となり、共に歩んで行きます』

「でも、この世界では、常に剣を持ち歩くことなんかできないぞ？」

『それは大丈夫です。我は誠吾様の心の中に存在させて頂きます。必要なときに、私の名を呼んでいただければすぐに実体化して、お役に立ちましょう。』

「そうか。とにかくこれから宜しくな！」

誠吾のその言葉に、剣は光ったように見えた。

朝日の中で、こうして運命の邂逅は終わった。

しかし、これから始まる修羅の道を、誠吾はまだ理解していなかった。

契約2（後書き）

ようやく序章の終わりですかね。。

これからも、長い目で見てください。

拙作に目を通していただき、有難うございます。

日常（前書き）

進展しないな。

日常

ふう。と 誠吾息を吐いたと同時に、手にした剣が突然消えた。

「お？なんだ？俺の心の中に行つたのか？」

『はい。まだ時は満ちておりません。我を呼ぶ声が聞こえたとき、世界を渡りましょう。』

「わかつた。それまでの間、色々詳しく教えてくれよな？」

『かしこまりました。徐々に我の力も、誠吾様に溶け込んでいくはずですし、感覚で理解することもあるかも知れませんが』

「そうか。時間が有るなら、鍛錬も出来るな。」

「それと、お前は俺の考えていること、全部わかつてしまうのか？俺も男だし、少々恥ずかしいことを考えることも有るのだが。一応聞いておきたくてな。」

『誠吾様が考えることは、基本的に我にはわかつてしまいます。ですが我は剣ですので、戦いに関するこのみに理解を示し、その他に事は、気にしません。以前の使役者たちとの時にも、色々見てきておりますので、心配は要らないです。いわゆる情愛のことは、ど
の世界でも同じですし』

「情愛って。。まあ、なるべく考えないようにするか」

その時、本家のほうから、誠吾に向かって声がかけられた。

「お兄ちゃん！朝ごはん食べないと遅刻するよ！珍しく、戻ってくるの遅いじゃん！」

誠吾の妹の優愛^{ゆあ}だった。

優愛は、誠吾の目から見ても、完璧に近い美少女であり、父をはじめ、家族全員で溺愛している。

「わかった。すぐにシャワー浴びてくるから、用意しておいて！」

(とりあえず、普通に暮らして良いんだな？)

《はい。問題はありません。しかし、なんと言う可憐な娘でしょうか。さすが誠吾様の妹君ですね。》

(なんか、碎魔にほめられても、うれしいもんだな)

《そうですか？。それと必要なとき意外は、我からは話しかけません。ですので、気にせずにお過ごしください。もちろん誠吾様から話しかけていただければ、お答えは致しますので。》

(そうか。それじゃ、聞きたいこと考え付いたら、話しかけるよ)

「優愛！お前最近稽古サボってるだろ！親父が言ってたぞ！」

「え〜。いーじゃん。今時の女子高生は、剣術なんてやらないもん！それより、早くシャワーしてきてよね？先に食べちゃっよ」

「わかったよ。すぐ浴びてくるから、待っていてくれ！」

「はい。食べ終わったら一緒に学校行こうね！」

.....

- - - - -
竹之内 誠吾 19歳 身長178cm 自分では思っていないが、
かなりのイケ面
竹之内 優愛 16歳 身長162cm 自分でもわかっている、
かなりの美少女

ふたりは、多摩市にある、小学校から大学までの一貫教育の学校に通っている。

その他登場人物は、おいおい紹介していきます。

日常（後書き）

またまた、お気に入り、ポイント 泣いてしまいました。
本当に有難うございます。

次は、裏神鬼流の歴史か、日常が続くかです。

勢いで書いていますので、設定がほころびはじめてきました。

どうか、長い目でみてやってください。

挿話 裏神鬼流剣術1 (前書き)

脈絡が。すみません。

挿話 裏神鬼流剣術 1

漆黒の闇の中である時刻だが、空は赤く、鈍く輝いている。集落全部が焼けていき、空を照らしている為だろう。

「卑弥呼様！お早くお逃げください！魔物の群れがすぐそこまで迫ってきています！」

「愚か者！民を見捨てて私だけ逃げられぬは！」

「しかし、魔物には我らが剣は通用しませぬ。悔しいかな守備隊の者たちも次々に討ち取られていつています」

時は大和王朝、卑弥呼の統治する国にも魔物たちが襲い掛かり、もはや壊滅は時間の問題と思われていた。

10年前の魔物襲来のときに、以前の土地をおわれ、ようやく新しい土地で、すべて順調に動き始めた時であった。

「私は逃げはせぬ！私の呪術が及ぶ限り、魔物を倒して民を守ろうぞ！」

「いけませぬ！卑弥呼様の力は十分にわかっておりますが、魔物の数が多すぎます！ここはいったん退き再起をかけるべきでございませ！」

「黙れ！民を守れずして、何が女王ぞ！行くぞ！着いて参れ！」

その時、卑弥呼と側近のそばに歩み寄る男がいた。

男は、遠く海を渡り、卑弥呼のもとへやってきた異国のものだった。

博識にて絢爛。そして国一番の戦士を
わけも無く叩きのめした強者であった。

「卑弥呼殿。」

「おお！竹弥殿！そなたは早く逃げろ！そなたの知識は無くしてしまつには余りにも惜しい」

「いや。私が納めた剣術は、魔物に対するものもある。それゆえ、共に戦いに参ろうぞ！」

「誠か?! それならば、共に民を救つてくれ！頼む！」

「わかった。私が先に出るので、卑弥呼殿は私の後ろから呪術にて援護を頼む」

挿話 裏神鬼流剣術1（後書き）

突然、誠吾のご先祖様のはなし。
ごめんなさい。次回は戦闘ですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8560i/>

誠吾の剣

2011年9月13日23時40分発行